

## イランの家族

東区牛田早稲田1丁目  
たが ふみ  
津谷 隆史

つい先ほど、イラン航空が成田—テヘラン(週2便)の運航を休止するとのニュースが入ってきた。1974年に就航した路線は事実上の廃止となるらしい。休止の主な理由は石油価格の高騰と乗客減による収益悪化とのこと。イランが核開発問題をめぐり国連制裁を受け、日本などからのビジネス客が減少したことも原因らしい。

私がイランを初めて訪問したのは2005年6月である。以来、毎年、イランを訪問し今年で4回目になる。世界から悪の枢軸とまで言われているイランに、また、なぜ行くのかとの質問をよく受ける。思い起こせば、2004年にイランの毒ガス被害者と彼らをサポートするイランのNGO組織、SCWVS(化学兵器犠牲者支援協会)のメンバーとの出会いからである。

1980年から1988年まで続いたイラン・イラク戦争で、イラクのサダム・フセインはイペリット(マスタード・ガス)などの毒ガスを使用し、イラン兵や市民に多くの犠牲者が出た。この戦争で、イラン国内では約300回の

毒ガス攻撃を受け、6,000人以上の人が死亡し、5万人近くが後遺症を患っている。当時の、イラン・イラクを取り巻く複雑な世界情勢の中で、欧米諸国ではこれらの事実を黙殺し、ほとんど世界には公表されていなかった。

2004年8月の広島世界平和記念式典にイランから10名の毒ガス障害者とSCWVSの医師を招いた。初めてイランから外国に出た彼らは、被爆にあった広島が美しい緑の街に復興し、仲良く米国や世界の人々と暮らしている広島市民を見て、驚きとカルチャーショックを受けたのであった。彼らにとっての願いは、毒ガス被害者がイランの国にいること、この事実を知ってほしいの一心であった。同時に、広島に滞在していると、次第に、彼らの表情が明るくなっていくのを感じた。それ以来、彼らとは家族としての連帯感が生まれたように思う。

4回目のイラン訪問は今年、7月3日から10日間を予定した。今回の目的は、毎年行っている、毒ガス被害にあった村を訪ねること。もう1つ重要なことは、2年前にイラン副大統領のもとでSCWVSと約束した、イランと広島の毒ガス障害に関する医学的交流を前進させるためであった。今回のイラン訪問のメンバーは、私たちの海外医療支援をしているNPOからの4名と、広島大学医学部病理学教授 井内康輝先生を加えた5名である。

7月3日、関西国際航空23:15発のエミレーツ航空で日本を発った。以前はイラン航空を使っていたが、関空からの便がないため最近ではエミレーツ航空を使用している。ドバイ経由でテヘランに到着したのが、7月4日のお昼前だった。テヘランには、なつかしいイランの家族が出迎えてくれていた。重度毒ガス障害者で障害者協会の世話役であるサーレツヒさんの自宅で歓迎昼食会をうける。(写真1)彼はイラン・イラク戦争では志願兵として戦地に行き、そこで毒ガス弾をう



(写真1) サーレツヒさんの自宅で昼食歓迎会、彼の家族と同じアパートに住んでいる戦争障害者の人たち。食事は床にビニールをひき、その上に料理の皿をならべる。野菜サラダ、くだもの、ナン、ライス、ケバブ(チキン、牛、マトンの串焼き)、アーシュ レシュテ(貝沢山うどん)、ゴルメサブジ(豆と肉と野菜の煮込み)など日本人にも食べやすく、食材も豊富にある。

けた後、英国で治療され一命をとりとめていた。その後、勉強し直して現在では、テヘラン大学で教鞭をとっている。イスラム信仰心の強い彼は私を兄弟のように慕ってくれ、家族としてイスラム教の伝統的なお守りの指輪をくれた。(もっとも妻は男同士でおかしいのではないかと見ているが)

昼食後、夕方の空路便で、イラン西部のケルマンシャへと出発する。ここは、テヘランから約400km西にあり、イラクとの国境に近い海拔1,400mの山岳地帯にある街で、イラクのバクダッドとテヘランを結ぶ、重要なラインとしてイラン・イラク戦争の激戦地となった場所である。(写真2)昨年、ノーベル文学賞を受賞したイギリス人作家ドリス・メイ・レッシングはこの地で生まれている。

ケルマンシャに到着後、県知事、市長の出迎えを受け、歓迎の夕食会に招かれる。4年前には、イランの公安が我々の行動を監視していたが、ここ最近では、訪問先で必ずと言っていいほど、多大の歓迎をうけ、検問はパトカー先導でフリーパスになった。これも現地、NGOのSCWVSのメンバーの努力によるものである。



(写真2) 今回、訪問した地域、テヘラン、ケルマンシャ、シラース。特に毒ガス弾の被害は、イラン西部のイラクとの国境地域(クルド地区)である。

7月5日は国境近くの、直接の被害地を訪問するため早朝に出発。イラン北西部は民族的にはクルド人の地域である。クルド民族の悲劇は、20世紀初頭から始まっており、メソポタミア北部からザグロス山脈にかけて広がるクルディスタン地方に、一方的に国境線がひかれ、そこに暮らしていたクルド人は、トルコ、イラン、イラクなどの国々に分割されてしまった。そして、総人口2,000万とも3,000万人とも推定される、ペルシャでもアラブでもない、独自の言語を持つ、世界最大の“国家なき民”とも言われている。イラン・イラク戦争当時、フセインがこの地域の村々に、無差別で毒ガス弾を使用したのも、クルド民族に対する思惑があったようだ。

バスに揺られて、3-4時間、小麦の穀倉地帯を抜け、標高2,000mを越す山道をひたすら走って、ようやく目的の街Nowdeshehに到着する。山の傾斜に積み重なるように煉瓦の家が作られていた。街の代表者の歓迎をうけ、毒ガス被害で亡くなられた方の墓に案内される。多くの町民が集まり、毒ガス被害者の方々とのミーティングも用意された。今回の訪問では、私たちの訪問があるため、こ



(写真3) 呼吸機能障害をもつ毒ガス被害者



(写真4) クルドの子供たち、毒ガス弾被災地

れにあわせて、各国のメディアもプレスビザがとれたらしく、ロイター通信、NHK、BBC、スペインの放送局などからの取材合戦も盛んであった。直接の毒ガス被害者は、症状を訴え、政府の援助への不満、治療効果が思わしくないことへの不安などを訴えていたが、街の人々は、非常に明るく、海外との交流や原爆被災地広島からの訪問を非常に喜んでいた。(写真3、4)

旅の後半では、今後の医学研究を進める上で重要となる大学との共同作業を検討するため、ケルマンシャ大学、シラズ大学を訪問した。特にケルマンシャ大学では、毒ガス被害者の免疫関係についてのデータを見せてもらい、広島とのコラボレーションを模索した。また、テヘランでは、イラン医学アカデ

ミー終身メンバーのBahadori教授を交え、井内教授とイラン・日本(広島県大久野島)の毒ガス障害者の気道病変について、前向きな検討会ができたことが今回最大の収穫であった。(写真5)

今年のイランの旅は、例年になく、猛暑と過密スケジュールのためか、1日ごとに一人ずつ体調が崩れていった。しかし、家族として迎えてくれる、彼らを見てみると来年も、訪問したくなるのである。かつて思いもなかった中東の国、イランの人たちとの交流が、イスラム文化にふれ、お互いを理解し合える家族となり、心の共有ができたことは私にとって大きな財産である。世界的に孤立しているイランではあるが、私たちの活動が、政治的に見れば細い糸かもしれないが、中東の和平に貢献できることを願ってやまない。



(写真5) 左から筆者、井内教授、Dr. Moslem Bahadori, Iranian Academy of Medical Sciences, professor of pathology、Dr. Akbari

おすすめ：イランの文化を知るのに参考になる映画DVD

“風の絨毯” (日本・イラン合作)

<http://www.cafegroove.com/movies/kazeju/index2.html>

